

欧米の舞踊学におけるジェンダー研究

—バレエの場合—

鈴木 晶

ここでは欧米の舞踊学におけるジェンダー研究の流れを概観したうえで、舞踊の一分野であるバレエ（とくに、いわゆるクラシック・バレエ）に焦点をあて、バレエにおけるジェンダー研究の動向と将来への展望を探りたい。

舞踊学においてジェンダー研究が起こった、というより他分野におけるジェンダー研究の波が舞踊ジャンルに押し寄せてきたのは1980年代後半のことである。他分野におけると同じく、最初はフェミニズムという形をとっていたものがやがてジェンダー研究という別の衣をまとうことになる。先駆的な仕事としてはJudith Lynne Hannaの*Dance, Sex and Gender* (1988)が挙げられる。Hannaはこの大部の著書の半分以上を西欧劇場舞踊の分析にあてており、その射程は広いが、いまだ明確な視点と方法論を欠いていた。

1990年にはJudith Butlerの“*Performative Acts and Gender Constitution*”が発表される。この論文は広く多方面に大きな影響を及ぼしたが、舞踊もその例外ではなかった。とくにperformanceの概念をButlerより一歩進めて、舞踊こそジェンダーおよびセクシュアリティの問題が最も先鋭化するジャンルであるという意識が広まり、Christy Adairの*Women and Dance: Sylphs and Sirens* (1992)やGabriele Kleinの*Frauen, Körper, Tanz. Ein Zivilisations geschichte des Tanzes*のような研究書が一時代を画した。

バレエ研究に焦点を絞ると、Gelsey Kirkland and Greg Lawrenceの*Dancing on my grave: an autobiography* (1986)がバレエにおけるその後のジェンダー研究に大きな影響を与えることになる。もちろんこれは研究書ではなく、ABTのかつてのプリマ・バレリーナの自伝である。舞踊の他ジャンルには見られないバレエの特殊性については、すでにL. M. Vincent, *Competing With the Sylph: Dancers and the Pursuit of the Ideal Body Form* (1981)とかS. Gordon, *Off Balance: The Real World of Ballet* (1983)などが問題提起をしていたが、Kirklandの自伝が出てから、Cynthia J. Novack, “*Ballet, Gender and Cultural Power*” (1993), Anna Aalten, “*Femininity as Performance/Preferring Femininity: Constructing the Body of the Ballerina*” (1995)をはじめ、数多くのバレエ研究者が積極的にみずからの体験を踏まえてバレエにおける特殊な問題（それは一般にバレエの魔力とか魅力とされているものでもある）を指摘・告

発するようになった。

バレエにおける特殊な問題にはまず、組織構造上の性差別がある。多くの組織において女性＝ダンサー＝労働者、男性＝コレオグラファーあるいは経営者＝支配者という性差による階級差が顕著に見られるということである。Kirklandは前掲書において、George Balanchineについて、「[[彼は]ダンサーたちの創造性を殺し、彼らを、何の思考力ももたないダンサーにしてしまう]」、「バレリーナはすべてをバランシンに委ね、彼のためだけに存在するようになる」と書いている。

しかし、より重要で深刻な問題はバレエそのものに内在している。バレエは他の舞踊ジャンルと違って、19世紀の作品をレパートリーとしていて、そのまま現在も上演する機会が多い。19世紀のバレエの多くが性差別的であることはいうまでもない。その典型例はパ・ド・ドゥで、そこにおいては、女性は男性に身を委ね、いっぽう男性は力によって女性を支配し、背後で操り、商品として男性の視線へと提供する。

それと関連したもうひとつの問題は、バレエはその発生において女性の身体を非身体化を内包していたということである。たとえばポワント技法はバレエの最大の特徴といえるが、Volynsky (*Kniga likovaniya*, 1925)によれば垂直志向性・天上志向性・反重力の象徴であるこの技法は、女性にしか適用されない。ロマンティック・バレエの時代に妖精という身体をもたぬものが好んでテーマに取り上げられたことに示されているように、バレエという身体芸術は身体を否定を内包していたのである。この矛盾のために、女性バレエダンサーは過酷で不健康な身体作りを余儀なくされる。ふたたびKirklandを引用すれば、彼女は「自分を拷問にかけ」、「いかなる激痛をも無視するようつとめ」なければならなかった。その結果、血行障害、骨盤の未発達、腰への過重な負担といった身体障害だけでなく、拒食症も珍しくない。また幼少時から生活の大半を稽古に捧げなければならないために、まったく世間離れしてしまうという問題も生じる。

したがってバレエにおける以上のような問題に対する解決策の模索は、バレエの形式・内容（たとえば19世紀バレエをそのまま上演しつづけるのかといった問題）にも、また技法および訓練法（それは、たとえばアラベスクが美しいといった美意識の問題にも結びつく）にも関わってくるのである。